

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

○異世界耳かき

※セリフ前数字は立ち位置番号となります。  
(バイノーラル指示表を参考)

※数字が【ー】で続く場合は初めの番号から次の番号へ移動しながらセリフを読みます。

※シナリオ中に魔法が登場しますが効果音の有無や音自体はお任せします。

シーン1

歩く音

せんにちは」

۱۱۵۰

「んなさい、急に声かけちゃつて。今日も来てくれたんだね、嬉しい」

か、もうお店の前まで来てくれるとは思っていなかつたけど、今日は少し早いのね』

きまでね、そこをお散歩してたの」

「つ、今日すごくいい天気じゃない？」

散歩にはちょうどいいかなーって」

そうだ。まだ時間に余裕があるから、今日はまず一緒に散歩でもしない?』

森の空気を感じながら。お弁当なんかは無いけど、お菓子はあるから」

でミニピクニッケ……どうかな?」

丈夫、お散歩する時間はコースに含めないから』

、だから特別に、ね？」

40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21

9  
1  
「ふふっ、決定。お菓子持つてくるから少し待つてて」  
扉を開けてお店にお菓子を取りに行く  
少しの時間の後、奥からお菓子をもつて帰つてくる  
「お待たせ。じゃあ行きましょうか」

9-1  
「お待たせ。じゃあ行きましょうか」

1  
「ふふっ、決定。お菓子持つてくるから少し待つてて」  
扉を開けてお店にお菓子を取りに行く  
少しの時間の後、奥からお菓子をもつて帰つてくる  
「お待たせ。じゃあ行きましょうか」

シーン2  
森の中で散歩し  
「（）らへんでいいかなー、少し休憩しましよう」  
「（背伸びして）んーっ。ああ、本当に良い天気ね」  
「空気も一段と美味しい感じがしない？少し肌寒くはなつてきたけれど」  
「あ、大丈夫よ上着は。ふふっ、ありがと。優しいのね」  
「まあ、いつも優しいのだけれど」  
「さあさあ、お菓子でも食べながらのんびりしましよう」  
「好きなの取つていいからね？」

下に簡単な布を引きお菓子を広げる  
「ん？遠慮なさらず。どーぞ？」  
「ちなみに、私のお勧めはー・・・これかな、はむつ」  
「もぐもぐ、んーっ。おいひ。ごくん。あ、そうそう」  
「前に言つてた・・・えと、元の世界への帰り方はわかつたの？」  
「私もね、キミから聞いてから色々考えてみたのだけれど」

60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41

---

3 3

「どうすればいいのかはやつぱり見当もつかなくて・・・ごめんなさい」

「私も初めて聞いた時はなんのことだかわからなくて」

「あの時は混乱して恥ずかしい姿を見せちゃったわね」

「森の中、見たこともない格好でキミが歩いていて、凄く不安そうな顔で」

「あんな顔を見てしまつたら声を掛けずにいられなかつたの」

「少し怖かつたけれど、でも。あの時声を掛けたおかげでキミと出会えて」

「今ではこんなに仲良くなつちやつたわね」

「ふふつ、そんな少しも迷惑なんかじやないの。むしろその反対」

「素敵な偶然が、私たちをめぐり合わせてくれた・・・そう考へると、とてもドキドキして」

「今こうやつてキミとお話している時間は奇跡がくれた素敵な事なんじやないかつて」

「キミも、そやは思わない?」

「それとも、精霊様のお導きだつたりして」

「そう、精霊様。キミの世界にはいよいよね」

「出会つたばかりの頃は簡単にしか説明しなかつたけど、この世界には3大精霊と言われる存在がいるの」

「秩序・愛・そして癒しを司る精霊様」

「その3大精霊が人々の争いに終止符を打つため、手を取り合い誕生させたのがこの世界と言わわれているの」

「おとぎ話だから、どこまで本当かはわからないのだけれど」

「でも、そのおかげかキミの言つていた様な悪い人はここにはいよいよね」

「私が世間知らずなだけかも知れないけど、少なくとも今まであつたことはないかな」

「皆が幸せに、笑顔で過ごせる世界。ここはそういうところ」

80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61

---

「そんな精霊様が、これもおとぎ話だけれど、不思議な力で偶然という奇跡を起こすことがあるらしいの」

「その偶然は必ず素敵なものとなる」

「本当かな？ つて疑っちゃうけど。でも、この世界を作った方々ならありえるのかもって」

「それに、そう信じたほうが素敵でしょ？」

「キミの世界にいるっていう神様？ というか方に近い存在なのかも」

「——あ、精霊様で思い出した。魔法は使えるようになった？」

「んん、やっぱり難しいのね。別の世界の人でも適正とかあるのかなと思つたのだけれど」

「生活魔法だけでも覚えていると、これから的生活とても楽になると思ったのに」

「ん？ 私？ 私は癒し属性系統の魔法と簡単な物質転移しか使えないの」

「あー、そつか。まだ私の魔法について説明したことなかったつけ」

「それなりに会っているのに、一度も見せたことなかつたものね」

「結構お店でもバンバン使つてているのだけれど、キミつてばいつもすぐ私の膝枕でスヤアつてしているもの」「見てみたい？ んー、といつても、そんな見ごたえのあるものではないのだけれど」

「そうねー、たとえば」

「【おいで】」

「というふうに、頭に思い浮かべた耳かきを手元に召喚できたり」

「【戻つて】」

「という風に唱えたり思い浮かべると元あつた場所に帰つてつたり。これが物質転移」

「なんでもかんでも私は呼び出せないけど、簡単な物なら自由に出来るの」

「キミを膝枕しながらあれもこれも出来てたのはこれのおかげ」

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81

「ちなみに」

「私自信も、こうやって瞬間移動できたりします」

「さすがに私くらいのサイズになると、このぐらいの距離が限界だから使い道はあまり無いのだけれどね」

「ちょっと脅かしたりお茶目な事が出来ちゃうって感じかしら、なんて」

「癒しの魔法は・・・これはお店で実践したほうがわかりやすいかもしないわね」

「……さてと、ちょうど良いお時間にもなつたし。お店のほうに戻りましょうか」

「ん? 物質転移でつて、もおー、楽しそうとしないの。それによれば出来ないんだつてば

「（囁き）後でたつ。ふり廻してあげるから

「今は頑張つて歩こ?ね?

「歌子」

シーン3

お店に戻ってきた2人が部屋に入り

「はい、お散歩お疲れさまでした。今お茶を用意するので座つてお待ちください」

2 地点からお茶淹れる音

「肌寒かつたですから、温かいお茶を淹れますね」

「温かいおしごりも、はい、どうぞ」

「ん？どうかされましたか？」

「あ、はい。敬語ですけど・・・先ほどの楽な話し方のほうが良かつたですか?」

l20 l19 l18 l17 l16 l15 l14 l13 l12 l11 l10 l09 l08 l07 l06 l05 l04 l03 l02 l01

2

「ふふつ、ごめんなさい。確かにいつもはこっちの話し方だけど、さつきまでキミとプライベートで話してたから、メリハリつけるために敬語にしちゃった」

「だつて、なんか格好がつかないじやない？ずっと楽に話していると」

「ヤミは大事な大事な常連様だから、出来るお姉さん感を見せつけておこうかなーなんて

「まあ、今更なのぢやナジ・・・・・・よ・・・・・・うぞ。少し熱いからお口火傷しないようこら

卷之三

卷之三

かかれてゐる

甘えん坊さんなお口でも飲めるようにしておいたよ

お茶を飲む

「どう？美味しい？」

「今日の茶葉はね？いつもより奮発してるんだよ？」

「」の濃みがお口に合えばいいのだけれど

「ふふ？、大丈夫そう？良かつた

「 り よ ー か い で す 」

転移で背後に移動する

「んしょつと、肩のマッサージからやつていくね

肩揉み開始

「えへへ、ちょっとイタズラに驚かせてみようと背後に転移しちゃいました」

| 40 | 39 | 38 | 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21

---

「いつもはこんなことあまりやらないけど、森での反応がよかつたからつい」

「キミってば、驚いた顔が可愛いんだもの」

「それに、他の人だとそこまで反応しないから」

「うん、だつてこっちの人達は転移とかめずらしくないから」

「少しば zipper するかもしれないけど、そこまでの反応はしないのよ」

「だから改めて、ああこの人は異世界から来たんだなーって思うかな」

「(少し焦って) あつ、えと。私たちの知らない、違う世界から来たんだなーって」

「共通点があるとしたらー、基本的に道具は見知ったものだつて言つてたわよね」

「例えばお菓子とか、服の基本的な素材なんかも一緒のようだし」

「案外、私たちのこっちの世界とキミの世界は似ているのかもしれない」

「こっちの世界にはね? 昔からの言い伝えのような物があるのだけれど」

「世界っていうのは、世界と世界が一枚の壁のようなものを隔てて存在してるので言われてて」

「ある時、それぞれの世界でとある出来事が起きるとその壁を簡単に超えてしまつて、他の世界に迷い込んでしまうことがあるって」

「その結果、人物と一緒に違う世界の文化や物が紛れ込んでしまうようよ?」

「でもそれって、違う世界に住む者同士でも、もしかしたら知らぬ間に同じものを好きになつたり、同じものを食べていたり」

「なんかとてもロマンチックなお話だなーなんて、初めて知ったときは思つていたもの」

「んーそうね、この話は私がまだ小さなときに学校で教えてもらつたかな」

「そお、学校。あるのよ? こっちにも」

160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141

「むしろ無いとここまで流暢にお話したりするのは難しいかな」

「でも、昔は無かつたそうで、それこそ当時は大変だつたそうよ？」

「人間やエルフやドワーフ。色々な種族が助け合うこの世界で言語<sup>げんご</sup>が無かつたときは身振り手振りで伝えていたそうだから」

「詳しいことはわからないのだけれど、ある日とある町に現れた一風変わつた賢者様が学校を作つたり色々な物を分け与えてくれたみたいで」

「そして、文明は進んだって」

「ちなみに、その賢者様は今でもご健在で、今もどこかにはいるそうよ？」

「私が知つてゐる知識はそれくらい」

「ほら、私つてばこの森からあまり出ないから」

「キミに色々教えて偉そうに見えるかもしれないけど、実は私自身も結構な世間知らずだつたりするの」「子供の頃までは王都の学生寮にいて、学校卒業とともにすぐこのお店を継いでいるから」

「そお、元々このお店はお父さんとお母さんのお店だつたの」

「あ、だけどね？一応言つておくと両親ともまだ元気よ？」

「私に癒し属性への適性があつたから、この店は任せたつて夫婦水入らずで長旅に出かけちやつて」

「2人とも今頃、忙しくつて謳歌<sup>おうか</sup>出来なかつた青春を取り戻してゐんじやないかしら」

「2人が出て行つてしまつ前に、もう少し甘えていたかつただなんてふとした時に思うの」

「・・・えと、だから、このお店にずっと私はいるし、世界を知れるのはここに来るキミのお話を聞く範

囲だけ」

「そんな私が世間知らずにならないようにするにはもつともつと、キミからお話を聞かせてもらわないと

180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161

---

いけないから

肩揉み終わり

「(囁き) 外の事、たくさん聞かせてね?」

「ふふつ、さ、肩の次はお耳のマッサージでもしましようか」

「いつもと同じ感じでよかつた?」

「ごめんね、ちょっと触らせてもらうね」

耳の触診をする

「んー・・・あらあら、結構疲れ気味じやない?」

「気の流れが詰まってる感じ」

「それくらいわかるよ、癒しの魔法使いであり属性持ちですから」

「お耳癒しながらお話しするね」

両耳のマッサージ開始

「私みたいな癒し属性持ちっていうのは、相手の体に流れる魔力とかの流れを感じることが出来るの」

「でも、キミみたいに魔力を持っていないタイプの人もいるんだけど、そういう人には生命力?のようなものが代わりに見えて」

「それを皆は気つて呼んでる」

「気っていうのは魔力とほぼ同じ流れ方をしていてね」

「疲れが溜まっていたりする部分だと流れが悪くなるの」

「その流れを良くするには直接その部位に癒しの魔法を流し込んであげる必要があるのだけれど」

「それを一番効率よくするのがマッサージをしてあげながらだつたり、癒し付与した道具を使つたりする

200 199 198 197 196 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181

---

のが効率的って言われているの」

「だからこうやって、よいしょ・・・よいしょってキミの耳がフニヤフニヤになるまで魔法を流しながらマッサージしてあげる必要があるんだよー」

「実際魔法が使われているかつて感覚は掴みづらいでしょ？なんか疲れがいつもよりも取れるなーみたいな」「だから、癒しの魔法って証明が難しいのよね。魅せるための物じやないから」

「さてさて、柔らかくなつた所からはたくさん魔法を入れやすいから、いっぱいほぐさなきやね」「でも、キミつてばどうしていつも来てくれるのに疲れをため込んできちやうんだろ」

「私のマッサージがたりないのかな？」

「え？あー・・・キミに紹介してあげたお仕事？」

「確かにこつちで生活が出来るようになってお仕事を紹介してあげたけど」

「そつか、すつごく頑張ってるんだね」

「凄いな・・・私だつたらもし違う世界なんかにいっちゃつて」

「右も左もわからない時に、いくら生きていく為に必要だからつて割り切つてお仕事できない」

「それなのにキミはこんなに疲れが溜まるくらい頑張つて」

「え？今ではこつちの生活に慣れて充実してるからつて、やりがいを感じるのは良いことだけど無理はしちゃだめよ？」

「もー、これは本格的に癒してあげなきやいけないわね」

「と言つても、今まで手を抜いていたわけじやないからね？」

「より一層、私も頑張らなくちやいけないなつて」

「ほらつ、お耳のここなんか気の流れを感じなくたつてこつてるのがわかる」

220 219 218 217 216 215 214 213 212 211 210 209 208 207 206 205 204 203 202 201

---

「相当なことなのよ？これは」

「もしかしたら、これからは一日に2回は通わないとほぐしきれないかもね・・・なんて」

「ふふっ、真に受けなくて良いの。それぐらいこつてるから気を付けてねってことだから」

「そういえば、私が紹介したお仕事先にもお見えになるつていう仙人さんにはもう会つてる？」

「あ、まだなんだ・・・なかなかご多忙な方で有名だからいつか会えたらラッキーね」

「仙人さんはね、もう結構なお年のおばあちゃんなんだけど、癒しのスペシャリストなの」

「世界的に人気があつて、色々なお仕事先をめぐっては、そこで働く人たちを癒して去つていくの」

「何度かこのお店にも来てくださった事があつて」

「実はお父さん達とはお知り合いで、密かに癒しについての先生をしてくださつてるの」

「この前も、貴方はまだまだ癒しの道を歩めておりませんぞおうつて」

「色々ご指導頂いて」

「ほが朗らかで、温かい雰囲気の方」

「あ、それでその仙人さんがね、前に言つてた事なんだけど」

「癒しは心と身体そのどちらをも癒すのが大切だけれども」

「何より一番大切なのは、癒しを与えている時の一緒にいる時間なんだって」

「自分との時間が、相手にとつて癒しの時間と感じてもらえる事」

「それができて、一人前なんだてことを教えて頂いたの」

「私はまだそこまで出来てないか不安だけど」

「キミの凝り固まつたお耳が柔らかくなつて」

「気持ちよさそうな顔をしてもらえていると、一人前になつた風な感じは出るかしら？」

240 239 238 237 236 235 234 233 232 231 230 229 228 227 226 225 224 223 222 221

---

「ふふっ、いっぱいマッサージしたからお耳がもうフニャフニヤになっちゃった」

両耳のマッサージ終わり

「ちょっと頑張りすぎちゃったかしら?ふふ」

「それじゃあ、キミの大好きなお耳掃除を始めましょう」

「いつも通り、お膝に頭をコロンってしてくれる?」

「はい、よくできました」

「耳かきさん、おいで」

手に現れる耳かき

「ほら、いつもこうやつてるのよ?」

「今日は珍しく起きてたね、私がずっと喋つてたせいもあるんだろうけど」

「もし、本当に寝たかつたら遠慮なく言ってね?」

「疲れてるだろうし、ここではリラックスしていってほしいから」

「あら、私とお話をしていたいの?あらあら、眠れなくつてリラックス出来なくつても、もう責任取れませんからね?」

「じゃあ早速始めていきましょうか、左耳さん、お邪魔します」

左耳、耳かき開始

「と言つても、いつも通り綺麗なお耳ですけど」

「毎回お耳掃除しているものねー」

「でも、慣れてくれたみたいで安心する、ちゃんとお耳の穴が見れると」

「初めてこのお店を利用しててくれた時なんか、私のお膝の上で緊張していくガチガチだったものね」

260 259 258 257 256 255 254 253 252 251 250 249 248 247 246 245 244 243 242 241

---

3

「小刻みに震えるもだから、あの時はお耳も正確に見えないし耳かきをいれても狙いが定まらないし、とても怖かったわ」

「あら、どうしたの？お顔赤くして、久々に初心を思い出してしまったかしら」

「ごめんんさい、意地悪だつたわね」

「え？仕方がなかつた？」

「そうねー、あまりこういった経験が無いって言つてたものねー」

「それが今では、あつという間に寝てしまうほど安らいでもらつて」

「これほど癒しを提供する者として嬉しいことはないわ」

「癒しの魔法をかけていたつていうのも原因でしようけど」

「お耳のマッサージの時に魔法を流し込みながらマッサージをしてるつて言つたでしょ？癒し効果で気持ちいいから普段よりも本当は眠たくなるのよ」

「さつきのマッサージの時はいつもよりは抑えめで流してたのもあるけど、やつぱりお話をずっとしてたから眠たさよりも目が覚めてしまつたのかも」

「今までがあそこまで話していなかつたり、そもそも静かにしていたから、すぐに眠つてしまつていたつてのもあるかもしねないわね」

「ん？今？今は掛けてないわよ？」

「んー、今はね、そうねー・・・」

「なんとなく、こうした方が良いと思つたの」

「リラックスしてもらわないといけないから、本当はいつも通りにして眠つてもらつて」

「心も身体も最上級にリラックスしてもらう・・・そうしなければいけないのだけれど」

280 279 278 277 276 275 274 273 272 271 270 269 268 267 266 265 264 263 262 261

「なんでかしらね、今日はキミとこうやつてお話ししたいなつて思つてしまつたの」

「うめんなさい、ワガママ言つて。もしもいつも通りにスツと眠りたい時は言つてね」

「でも、ワガママを許してもらえるのであれば、今日はこうやつてお話してみたいな」

「ふふつ、ありがとう」

「へ」ついうのつてたまにあるの」

「突然ふいに、こうしたほうが良いんじやないかって」

「きっと、精霊様がご助言で導いてくださっているのかもしれないわね」

「それぐらい、ただ思うのじゃなくて、感じるの」

「——ねえ、話変わるのだけど変なこと聞いても良い?」

「私の初期の頃の印象ってどうだったのかな？」

「いえ、初めてというよりも、少しお話した時かしら」

「森でも話した通り、キミが不安そうな顔をしてた時は怖がられてるのかなって思ったの」

「だつてそうじやない？ キミにとつてはなにもかも見慣れぬ世界で、不安で。そこで初めて会った人」

「信用していいのか、とか。凄く思われるのかなって」

でも、少し話していたらキミの表情が和らいでいつて、あの日、ここで食事したの覚えてる？」

あら、覚えてないのね。まあ、あの状況じゃあ無理も無いけれど」

「私が出した料理を疑いもせず食べててくれたの」

「あの時は、嬉しかつたな」

「キミにとつては何気ない行動だつたかもしれないけど」

「とても心がポカポカして」

300 299 298 297 296 295 294 293 292 291 290 289 288 287 286 285 284 283 282 281

「それがキツカケでお世話焼きすぎちやつて」

「迷惑じやなつたかしらつてたまに反省しているの」

「だから、どうかなつて」

「印象悪かつたら通つてない？」

「それはそうかもしれないけど、キミつてば優しいから気を使わせてしまつてるかもつて」

「純粹に来たいから・・・そう」

「（独り言のように）なら、期待していいのかしら……でも」

「いえ、ごめんなさい。なんでもないの」

「そう言つてもらえて嬉しかつたつてだけ」

「はあー良かつた。胸のモヤモヤが取れた」

「このままだつたら、私のほうこそ癒しが必要だつたかもしれないわね」

「あ、そうそう。モヤモヤが取れてふと思ひだしたのだけれど、王都にね変わつたお菓子が出来たそうよ?」

「なんて言つたかしら……わたかし? どういうアワアワな雲みたいな甘味たそうで

ん？ あら 知ってるのね。もう食へたりするの？

お恥ずかしながら、甘いものに目がなくて……お、今知ってるよ、て顔したでしょ】

【前】  
前にお客様から聞いてから気になつてたのよ】

「…元の世界に？」  
「そんな偶然があるのね」

偶然にしては出来すぎかしら

「もしかしたら、王都にキミと同じ世界から来た人でもいるのかしらね」  
「そうであつたなら……そうね何かのキツカケにはなるかもしけないわね」

320 319 318 317 316 315 314 313 312 311 310 309 308 307 306 305 304 303 302 301

---

「いつかは、そんな・・・素敵・・・な日が来るのかも」

「――で、どうなの？そのわたがしというのは美味しいの？」

「もし一緒に物ならとても甘い・・・そつかー・・・んく、私も王都にお出かけしたいなー」

「最近全然王都に行けていないから、買い物すらも出来ていないのよ」

「そうねー・・・最後に行つたのはもう2か月前くらいかしら」

「日用品のなんかは魔術配達屋さんが持つててくれるの」

「注文して5分以内には届くから、便利なのよ」

「ほら、キミの世界にも似たような物が・・・あるんじやないかしら？」

「今までの話を聞いていると、文明が発達しているようだつたから」

「そこまで早くないのね・・・なるほど」

「でも、そうね。そんな便利な物に頼り切つてずっとこの森に引きこもつてもいい気がするし」

「近々お出かけでもしてみようかしら」

「あー、そんな時にエスコートしてくれる方がいるととても助かるのだけれど」

「どこかにそんな心優しいお方は居ないかしらー？」

「たとえば、私のことをよくわかつていて」

「頻繁にお会いする方で」

「私のお膝を独占しているような・・・ふふつ」

「ね、どうかしら。キミと知り合つて一度も一緒にお出かけしたことないし」

「ふふつ、ありがと。その日を楽しみにしてるわね」

「さて、そろそろ」

340 339 338 337 336 335 334 333 332 331 330 329 328 327 326 325 324 323 322 321

---

左耳かき終わり

「反対側のお耳もお掃除しましようか」

「はい、反対側にコロコロー」

身体の向きを変える

「じやあこつちもお掃除しちやうわね」

右耳かき開始

「こつちのお耳も相変わらずねーとでも綺麗」

「たまにはもう少しやりがいのあるお耳にしてくれたつていいのよ」

「恥ずかしいって、気持ちはわかるけども」

「一応、ここは耳かき屋さんなんだから」

「お耳がいつも綺麗じや私のやることが大半無くなつてしまふもの」

「それに、キミのお耳お掃除するの、これでも結構好きなのよ?」

「かきかきーつて始めると目を細めて気持ちよさそうにしてる横顔とか」

「しばらくお掃除しているとウトウトしちやうどころとか」

「とてもかわいらしくて、ついつい甘やかしたくなつちやうから」

「たぶん、私に弟がいたらこんな感じだったのかなーなんて考えたり」

「ふふつ、男らしくないって事じやないのよ?」

「キミはちゃんと男の子よ?カツコイイ。自信もつて甘えていいんだからね?」

「ふふつ、でも私はそうね・・・凄く男らしくて人もカツコイイとは思うけれど」

「何より、こんな私なんかに頼つてくれるような、何かを求めてくれるような」

360 359 358 357 356 355 354 353 352 351 350 349 348 347 346 345 344 343 342 341

---

「そんな人が好きかな」

「過少表現なんて言つてくださる方もいるけど」

「癒しの魔法は成長途中だし、なにより物質転移なんか簡単な物しかできなから」

「さつき話した魔術配達屋さんなんて、凄い人は山3つ分先のお宅にも瞬間配達出来るそうよ?」

「え?私の癒し魔法が一番好き?」

「そ、 そうなの?もう、お口が上手ね」

「嬉しいから何かしてあげようかしら?」

「ありがと、本当にそう思つてくれているのはよくわかるから、ただそんなに真剣に言われると」

「いくらお姉さんでもその、照れちやうのよ」

「だから、ね。うん」

「・・・」

「困つちやつたわね、どうしよう」

「それじやあ・・・」

「(耳元良き吹きかけ) ふー・・・」

「ふふつ、どう」

「普段こんなお耳に良き吹きかけるなんてしないのよ?」

「私を照れさせてた罰になつたかしら、それとも・・・ご褒美?」

「もつとして欲しいなら・・・してあげてもいいよ?」

「なんて、冗談」

「(独り言) これ以上は、隠せる自信無いもの・・・」

380 379 378 377 376 375 374 373 372 371 370 369 368 367 366 365 364 363 362 361

---

「何でもないの」

「そうだ、最近ね。美味しい茶葉が手に入つたから後でお茶でもいかが？」

「それで、さつき嬉しいこと言つてくれたお礼にしちやう」

「今ならお茶菓子も付けちゃうわよ？」

「それも、森で食べたような簡易的なものではなくて」

「私お手製の少し凝つたやつ」

「あのね、可愛いくて美味しいお菓子が出来たの」

「本当は誰かにも見てほしかつたのだけれど、中々機会がなくて」

「凄いのよ？新種のお砂糖でね？まさかのマンドラゴラの涙から採取されたお砂糖らしいの」

「程よく甘くて、口当たり完璧。それに甘さが口に残らなくてスッと溶けて」

「今までのお砂糖では実現不可能と言われたそのまま焼けるつていうのが特徴なの」

「普通焼いたら溶けちゃうじゃない？違うの。これは単体で焼けて、他の粉と混ぜて焼くと溶ける不思議な……」

「あ……ごめんさい。ついいっぱい話してしまって」

「普段お菓子作りの事とかでお話出来る人がいなかつたから……」

「嫌じやなかつたかしら……」

「そう？良かつた……それじやもう少し落ち着いて話すわね」

「それで、そのお砂糖を使って作つたものがあつて、とてもおいしく出来たら是非キミにも感想が聞きたいの」

「自分では美味しいと思つていても、他の人にはそうじやないかもしれないじやない？」

100 399 398 397 396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381

---

「それに、なにより」

「キミに食べてほしくて、その。頑張ってた所もあるから」

「いつも頑張つてて、ヘトヘトな時もあるはずなのに、それでもこのお店に通つてくれて」

「キミは充実してるからこれぐらいヘツチャラだなんて言うけど」

「なんとなくだけど、森で一人な私を心配して来てくれるのもあるのかなって」

「もしそうだったら、何か私もしてあげたいなって」

「でも、私には立派な事は出来ないから」

「数少ない得意なお菓子作りで喜んでもらえたならなって」

「・・・本人に伝えると恥ずかしいね、想像以上に」

「そういうことなので、是非後で食べてみてください」

「あ、もし美味しくなかつたりしたときはちゃんと言つてね？」

「その時はもつとキミの好みな味に仕上げられるように頑張るから」

「いいの、これは私が好きでやつてることなんだから」

「それにやつぱり、キミにとつてここに来て癒しの魔法や耳かき、マッサージを受けるのが幸せなら」

「私にとつての幸せは、キミの笑顔が見られることだから」

「こうやつてずっと、私のお膝の上を無防備な顔でコロコローつてして。そんなキミを見られれば」

「それで、じゅうぶんだから」

右耳かき終わり

「はい、こつちのお耳も終わり」

「さて、ここでお姉さんから提案があります」

120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 102 101

---

「先ほど言っていたお菓子なのですが、普通に座つて食べるか」

「(囁き) この膝枕のまま・・・私に食べさせてもらうか、どっちがいいですか?」

「ふふっ、固まつちやつた。固まつてちや動けないわよー・・・困ったわねー」

「え? 力が入らない?」

「ふふっ、どうしてかしら。もしかしたら悪いお姉さんが癒しの魔法で脱力でも付与してゐるのかもしれないわね」

「そうだとしたら大変よ? キミは私のお膝から離れることが出来なくなつちやうから」

「ふふっ、さて、冗談はさておき。いいの。私がしたいことだから、そのままお膝の上でコロンつてしてて」「キミを甘やかすのクセになつてきてるのかもしれないわね、私」

「右手にお菓子、左手に紅茶」

両手にそれぞれが呼び出される

「こんな時のために紅茶はすでに作つておいたの」

「特製の茶葉だから、作り置きしてても風味が落ちない」

「さすがに紅茶は膝枕では飲めないだろ? からこつちに置いておくわね」

「さてさて、本命のお菓子さんの登場です」

かわいらしい袋から一口サイズのクッキーのような物を取り出す

「見て、一口サイズの薄ピンクな色味<sup>いろみ</sup>、可愛いでしょ」

「あ、顔の向きはそのままでいいわよ? ちゃんと食べさせてあげるから」「少し身体を曲げるね」

「はい、あーんして?」

140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121

「あーーん」

「どう、かな・・・・」

「え？味がわからない？あら、そんなに味薄くしてたかしら」

「ん？どうしたの？」

「——あ・・・ごめんんさい、胸が頭に乗つてたのね」

「お顔をお膝と胸でサンドイッチしてたなんて・・・苦しくなかつた？」

「なるほど、緊張して味がわからなかつたのね・・・」

「食感は・・・柔らかかつたつてそんなわけないでしょ？それサクサクしているものなんだから」

「もお、お胸の感想とごちやごちやになつてるじやない、落ち着いて？」

「それで、改めてどうかしら、甘さ加減とか」

「美味しかつた？良かつたあ・・・・」

「もしよかつたらまだあるから是非食べてね」

「もし（ご）希望なら、また食べさせてあげるわよ？」

「味がわからなくなつて、食感が柔らかくなるかもだけど・・・ふふつ」

「はい、私もそろそろ恥ずかしいのでそんな事は出来ません。ごめんね、座つてゆつくり食べましょうか」

膝枕から起き上がり隣に座る

「まだまだこれだけあるから好きに食べていいからね」

「それと、紅茶もどうぞ。口の中スッキリすると思うから」

玄関で扉をノックする音

「あら？どなたか来たみたい・・・ちょっとここで待つててね」

160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142 141

部屋の扉を開け閉めし玄関に向かう

扉越しに遠くからと「うどころ声が聞こえる

「あら、おひさし——です」

「え、どうしてそれ——はい——わかりまし——」

「でも、もう少しだけ——はい、すみま——」

「大丈夫——いつかは——覚悟して——」

「いえ、ありが——はい、それでは——」

部屋に戻つてくる

「・・・・・」

「——えとね、良いお知らせが入つたの」

「仙人さんが今いらしてくれてね」

「その・・・キミが元の世界に帰る方法があるそうなの」

「ビックリよね、突然・・・見つかって」

「それでね、その方法なんだけどそれがまた急で、明日の朝に、賢者様が精靈様たちと協力してゲートを作りそうなの」

「本当はそのゲートで賢者様だけが帰る予定だつたらしいんだけど、仙人さんがもう一人いるつてキミの話をしたら一緒に帰るかつて話になつたそうで」

「そのゲートを使えば元の世界に帰れるつて。やっぱり賢者様もキミと同じ世界から來ていたのね」

「ちなみに、わたがしとかこの耳かき棒とかキミが見たことがある道具を普及していたのも賢者様だつたみたいよ?」

180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161

3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2

「帰れる目途がたつたから、娯楽や便利な道具を出来る  
「仕事の引継ぎとかは仙人さんがしてくれるみたいだか  
「（独り言）きつともう、向き合わなければいけないつ  
「なんだか、解決したらあつという間ね・・・うん」  
「王都への買い物も行けなくなつちやつたね」  
「別の日について、そななんだけどね。どうしても明日じ  
「それに、キミはもうだいぶここに定着しているから・  
「――ねえ、変な」と言つてもいい?」  
「私のわがまま」  
「今日・・・泊つていかないと?」  
シーン4  
※このシーンは全体的にウイスパー気味な感じで  
夜、添い寝している所  
「ふふつ、まさかキミとこんな風になるだなんて想像も  
「お布団、そつちは足りてる?身体冷やすといけないか  
「なんか・・・凄くドキドキする」「  
「誰かと一緒に添い寝だなんてしたことなかつたから・  
「あ、キミつば少し遠慮しててよ。身体離そうとい  
「もし嫌じやなかつたら・・・もつとこつちにきて?」

「だけ伝えていたみたい」「から安心してって言つてた」「ことなのね。キミも・・・私も  
しやないといけないみたい」「帰れるうちに帰らなきや」

もしてなかつた」「から寒かつたら言つてね？」

。」

「してる」

・・・

※このシーン4  
「ふふつ、まさか  
夜、添い土  
「お布団、そつ  
「なんか・・・本  
「誰かと一緒に  
「あ、キミって  
「もし嫌いやな

シ  
ー  
ン  
4

※このシーンは全体的にウイスパー気味な感じで。

夜、添い寝している所

「ふふっ、まさかキミとこんな風になるだなんて想像もしてなかつた」「お布団、そつちは足りてる?身体冷やすといけないから寒かつたら言

「なんか・・・凄くドキドキする」

「あ、キミってば少し遠慮してるでしょ。身体離そうとしてる」誰かと一緒に添い寝だなんてしたことなかつたから・・・」

「もし嫌じやなかつたら・・・もつとこつちにきて?」

500 199 198 197 196 195 194 193 192 191 190 189 188 187 186 185 184 183 182 181

---

3 3

「私の体温が、心臓の鼓動が伝わるまで・・・もつときて？」

「ふふつ、なんかおかしい。普段甘えさせてあげるって言つてゐるのに」

「こういう時は私から甘えちゃうだなんて」

「たまには、こういうのも悪くないかもしないわね」

「甘える側をすることによつて、その心を知る・・・みたいな」

「キミは誰かと添い寝したことはある？」

「私が初めてだと・・・初めて同士で嬉しいなーなんて」

「ふふつ、初めてなんだ。そつか」

「なんだろう、凄く恥ずかしくて照れて・・・なのに、凄く幸せなの」

「本当はね、仙人さんから話を聞いたとき、寂しかった」

「キミとのこの時間は、なんだかんだで続くと思つていたから」

「だからね、意地悪して、なんでもなかつたよ？ただの世間話だつたよつて・・・悪いことしようとも思つちやつた」

「けど、それじやダメなんだよね」

「キミにはキミの帰る場所がある」

「会うべき家族がいる」

「・・・慣れないと世界で必死に生活しようとしたキミを知つてゐる」

「そんな姿を知つてゐるから」

「きっと、帰るべき場所に帰れるのなら、それは帰らなきやいけないんだつて」

「キミの事を本当に想うのであれば、それが正解なんだつて」

520 519 518 517 516 515 514 513 512 511 510 509 508 507 506 505 504 503 502 501

---

「そう思つて」

「気づいたら伝えてた」

「だから、今日のこの添い寝は今までの感謝とお別れ会を兼ねて」

「そして、これからキミに少しでも私の癒しが届きますようにっていう願い」

「あとは・・・単純にキミともう少しお話ししてみたいという女子会かな?」

「ふふつ、でもこういうのって楽しそうじやない?」

「夜にお布団の中でお話するの、なんだかイケナイ事をしているようで、お姉さんワクワクしちゃうな」

「ホント、こんなに悪い子だつたかしら私。どこかの異世界人さんに影響されちゃつたのかも」

「悪い子といえば、仙人さんも悪い人。そうかなーとは思つてたけどまさか本当に賢者様がキミと同じ世界から来ているだなんて、教えてくれても良かったのに」

「もつと早くに知つていればキミの為に他にも何か出来たかも知れないのに」

「もー、ほつぺた膨らませちゃおうかしら。ふくー」

「ふふつ、ちょっとはしやぎすぎかしら」

「いつもは最低限お店の人としての自覚をもつてお話してたから」

「ここまで自分を出してお話しきれるのも珍しいかも」

「自分を曝け出しちゃうついでに、こんな事もしちゃおつかなさら」

キミの腕に抱きつく

「ぎゅーーー、えへへ。お姉さんらしくないことしちやつた」

「ごめんね、今日だけは許して」

「キミにはね、知つていてほしいの」

540 539 538 537 536 535 534 533 532 531 530 529 528 527 526 525 524 523 522 521

「いつものお姉さんな私も、キミの腕に抱きついちゃう甘えん坊な私も」「私のぬくもりも、そして柔らかさも」

卷之三

「明日の朝、笑顔でさよならつて送り出したいから」

「だから・・・」

「(囁き) 私を・・・知つてほしい」

「もうこれでキミを困らせちゃう」とだつてわかつてゐるけど

「これからのあるべきはずだつた私達の為にも」

「今は、このワガママ許されますか?」

「――ふふつ、本当に困つた顔してゐる」

「私から言い出した」とだけど、ダメだよ、そんな顔しちゃ」

「——笑顔、見せてほしいな」

「ほら、に一つで」

「——えー、それ本当に笑顔？」

「あははっ、やつぱり今日の私ははしゃいじやつてるみたいね

「ふあー、ごめんなさい。珍しくはしゃいじやつて疲れちゃつたみたい

「そろそろ・・・寝ましょうか

「ね、このまま腕を抱かせてもらつて、ハハ、かしらー

「ありがと。  
それじゃあ・・・おやすみなさい

【寢息 5分】

560 559 558 557 556 555 554 553 552 551 550 549 548 547 546 545 544 543 542 541

---

## シーン5

お店の玄関にて

「忘れ物はない？さすがに今回は忘れ物があるとお届けできなかから」

「ふふっ、大丈夫そうね。前みたいにお財布忘れてつちやうと大変だよ？」

「もし今回忘れてつちやうたらお店の運営資金にしちやうから」

「——お家に仙人さんがお迎えに来てくださるんですって。そしたら後はついていけば大丈夫なはずよ」「まさかキミにとつて仙人さんとの初対面がお帰りの日になるだなんてね、これも精霊様のお導きなのかな？」

「——準備は……出来た？」

「どうしたの？その顔。いつものお店から出ていくお顔と違うよー？」

「私との時間、楽しかった？」

「私はね・・・幸せだった」

「楽しいだなんて言葉じや足りないくらいに」

「まるで宝石のように輝いてた」

「きっとこれからもこの宝石は私の胸の中で輝き続けるから」

「私はこの輝きに見合う様に、これからも頑張る」

「そしてキミの事を、この森から応援してくるから」

「・・・そうだ、最後にとつておきを教えてあげる」

580 579 578 577 576 575 574 573 572 571 570 569 568 567 566 565 564 563 562 561

---

終わり

「どうしても疲れて辛い時は探してみて」  
 「癒しの魔法使いを」  
 「きっとキミの世界にもいるから」  
 「癒しの魔法使いには目印があるの」  
 「それはね・・・優しい笑顔」  
 「癒しの基本はね、与える側が笑顔でいることなの」  
 「キミの元いた世界でもそれは同じ」  
 「辛いとき、寂しい時に。ふと周りを見たら」  
 「もしかすると、癒しの魔法使いが手を差し伸べてくれているかもしれない」  
 「だから優しい笑顔を、見逃さないで」  
 「きっとそこに気づけば」

「もう一ここには戻つてこないから」

「（焦つて）あ、えと、最後のは忘れて」  
 「さ、そろそろ行かない。仙人さんを待たせちゃう」  
 耳元に駆け寄り

「（笑顔で囁く）さよなら・・・・・いつてらっしゃい」